ソーシャルワークの実践分析の枠組みに関する試論

－　７次元統合体を基礎として　－

○　大分大学　　氏名　平塚　良子（会員番号・1140）

黒木　邦弘（熊本学園大学・2757）

キーワード３つ：実践分析　７次元統合体　ソーシャルワーカーの実践生成

１．研 究 目 的

ソーシャルワークはその萌芽期において科学的慈善がスローガンとして掲げられた。リッチモンドにより臨床科学的モデルが示されたが、約半世紀後にバートレットがソーシャルワーカーの反知性的態度を嘆きとともに指摘している。しかし、ソーシャルワークの専門職業化の進展にともない、実践における介入方法や結果において科学性が強く求められるところとなった。とりわけ、1990 年代の医学におけるエビデンス論は、ソーシャルワークに強い影響を与え、ソーシャルワークの世界は、エビデンスに基づく実践と結果を集積し、知識体系を構築することが喫緊の課題となっているのである。

しかし、人間と社会との関係に関与する社会科学的な分野に位置するソーシャルワークにあっては、自然科学的研究の結果としてのエビデンスというよりは、判断基準は多様でありエビデンスにも幅があると見る。エビデンスとして導かれる知識（理論）も広狭、大小、全体・部分など多様な次元から組み立てられる。実践の始まりから終わりに至るまでの一つのまとまりと論理的に一貫性をもった実践の体系が導き出されると実践理論ということにもなろう。こうした知識の形成には、何らかの判断基準を擁する分析枠組みが不可欠である。加えて、それには、ある論理的な一貫性を備える構成が重要となる。エビデンスとの関連でいえば、定性的な社会科学研究では、ある知識（理論）の正しさは常に数字によって示されるとは限らない。数字以外で理論の含意が示されてもよいのである。加えていうならば、これら２つの方法でもってある事実が示されることでもよい。

このような科学的認識の立場をとりながらであるが、本研究は、報告者の「ソーシャルワーク実践事例の多角的分析による固有性の可視化と存在価値の実証研究」（2005-2007 年度科学研究費補助金基盤研究（C））を基礎にした「ソーシャルワークの 7 次元統合体に基づく多面的多角的実践分析モデルの開発」（2009-2012 年度科学研究費補助金基盤研究(B)）の一環である。本報告では、ソーシャルワークの実践が実践知をその身に浸透させたソーシャルワーカーによる内的生成という行為特性を基本的な視座にもちつつ、一つの体系性を擁する実践の分析枠組みとは何かを示すことにある。

２．研究の視点および方法

これまで、ソーシャルワークの実践研究として介入方法の妥当性や効果、評価については、多くの研究がなされてきている。エビデンス志向のもと、体系的な枠組みを備え、実

践の分析を可能にする、あるいは、可能にすべく試みられた主要な先行研究には、例えば、岡本民夫(1883,1884,1885,1992)、芝野松次郎（2002)、A.Rosen(2003)らの成果がある。これらを参考に、報告者らの 2005-2007 年度の実践事例の提供を受けた調査研究の知見を整理・検討しつつ、ソーシャルワーカーの実践がどのように生み出されているか明示する。特に、前述のようなソーシャルワーカーの実践の生成過程の全体像を明らかにすることが、本報告の意図する実践分析の枠組みとは何かを示すことに通じると考える。

３．倫理的配慮

本報告は、体系性を備えた先行研究のレビュー、報告者のこれまでの研究成果から新たな実践分析枠組みの提示を試みるものであるが、本学会の研究倫理指針を踏まえている。

４．研 究 結 果

ソーシャルワークの実践分析の枠組みを構成するには、実践の全体像がまず把握されなければならない。本研究では、下記のような主要な特徴を導き出すことができた。

1)ソーシャルワーカーの身の内で生成されるソーシャルワークの実践像の明示可能

2)ソーシャルワークの実践のかたちー7 次元統合体と各次元の位置関係の特徴

7 次元には、①価値・目的、②視点・対象認識、③機能・役割、④方法、⑤場と設定、⑥時間、⑦技能（スキル）が構成要素として位置づけられる。

各要素の動きの特徴として、まず、①と②が相互一体的連動性の関係として存在すること。それが影響して③～⑥を発動させている。⑦の技能は、①～⑥すべての要素に関与する。技能は、ソーシャルワーカーの熟練した「わざ」であり、実践の行為に表現されるものである。

3)以上から、ソーシャルワーカーの実践行為は、価値論と認識論とを包含し統合的な行為を表現せしめる技能論とで成り立つと見る。

加えていえば、ソーシャルワーカーによる実践行為がソーシャルワーカーの内なる仮説生成を契機に、あるかたちが創造され終結を迎える一連の過程から成り立っている。そこには自ずとソーシャルワーカーのクリティカルな思考も反映される。ソーシャルワーカーの実践行為をソーシャルワーカーによる内発的な仮説生成から自身の身の内でソーシャルワークの諸要素を相互に連結させた多次元的統合体の表現とみなしうる。

5. 考 察

ソーシャルワークの実践分析の枠組みをつくることは、ソーシャルワークの科学的実践の展開であるとともに、その結果の集積は実践の科学化、理論の洗練を促す。実践分析は、特定の対象を限定することもありうるが、ソーシャルワーカーの実践が何であるか、その根拠を示すには、全体像が把握できる枠組みが不可欠である。　（当日資料配付予定）